

『比治山の上に見たきのご雲』

「父母の現代史」1978年版から

<広島・被爆の記録1> Y. K

私の両親は昭和一けたの生まれ、何不自由なく平穏な毎日を送っている私にはとても想像のできない、まさに波乱万丈の時代を生き抜いてきたと言えよう。夜、お酒を一杯飲みながら、時々父は苦しかった昔のことをしみじみと話すことがある。それはいつも決まって原爆のこと。

父が被爆したのは私より2つ少ない15歳の時。その頃父は、現在、広島大学付属病院のある所に在った陸軍兵器補給廠にいた。8月5日、原爆の落ちた前日の夜、B29が広島上空に姿を見せ、空襲警報が発令された。

8月6日、いつもは7時半に朝食をとるのだが、その日は前夜の空襲警報でいつもより遅く、8時に朝食をとり数人の友達と一緒に休憩所で休んでいた。8時15分、その瞬間「ピカッ」と空が光り、窓の外を見ると比治山の上に、もくもくと立ち昇るキノコ雲を見た。次の瞬間、ドーンという大爆風とともに、建物の外に飛ばされていた。どのくらい経ったのか、気が付くと外の溝の中に倒れていた。一緒にいた5～6人の友達のうち、一人は建物の下敷きに、もう一人は閃光で重傷を負って間もなく息を引き取った。周囲を見渡せば建物の下敷きになっている者、二階から落ちた者、ガラスの破片が身体じゅうに突きささっている者。まさにそれは無惨としか言いようが無かった。それから生き残った友達と、再び原爆が落とされるのを恐れ、日が暮れるまで防空壕の中にいた。その夜、再び空襲警報が発令され、近くの蓮池に隠れ込んだ。そしてその日から寄宿舎が壊れたので、夜になると駅のホームで寝ることにした。

あくる日から、怪我人の看病と、壊れた家の片付け。人々は毎日山のように積み重ねてあ

る死体を、まるで魚でも焼くように鉄の棒を使って焼いた。その嫌な臭いは、絶対に忘れられないと父は言う。川には人々が水を求めて集まり、そのまま息を引き取る人や、身体じゅう火傷で皮膚がはげただれた人などで一杯だった。見渡すかぎりの焼け野原。道を歩けば幼い子が、親とはぐれたのか泣き叫んでいた。8月15日、あまりのむごさに耐え切れず、父はそこを脱走し、汽車の車輻の間に挟まって夜中の2時頃やっと家にたどり着いた。それから約2週間は激しい下痢で寝込んでしまった。

8月30日、ようやく起きられるぐらいになり、再び広島に戻った。

9月1日、陸軍兵器補給廠は正式に解散となった。その日父が広島を発つ時に見た広島の街は、的場の角に立って未だ燃えている電柱と、一直線に並ぶ並木と原爆ドームだけ。あまりの悲惨さに、また胸が締めつけられる思いがしたと言う。駅のホームで、赤ん坊を亡くし半狂乱になって泣きわめいていた女の人の姿が、まだあどけなかった父の脳裏に焼き付いて、「今でも思い出される」と、しみじみとした口調で話してくれた。

あの日広島に原爆が落とされて、幾万もの人が死に、幾万もの人が傷つき、家族・友人と別れ別れになり、そして今なお多くの方が苦しみながら生きている。

15歳というまだあどけない少年時代に、辛く悲しい思いをした父にも“親友の死、冷たい駅のホーム、死人の山、焼けただれた街・・・”悲惨な思い出としての心の傷が今なお消えること無く胸の奥深く残っている。

今この世で一番平和を願っている人は、父と同じような痛手を今なお背負って生きている人達だと私は思う。決して「青春」とは呼べない青年時代を送った父や父と同世代の人達の苦勞を無にしてはならない。苦しみに負けずに生き抜いてきた父達の強い意志を見習って、今度は私達が父達に替わって“真実の平和”をかなえなければならないと思う。

『被爆で一変した父の人生』

「父母の現代史」1978年版より

<広島・被爆の記録2> T. T.

当時、父は県立広島工業学校（現 広島工業高校）に通っていて13歳でした。八本松から広島まで汽車で通学していましたが、普段なら7時半に広島駅に着く汽車が、8月6日は遅れたので、父は学校に間に合うようにと急いでいました。だから、学校の規則では乗ってはいけないことになっている市内電車に乗ろうと並んでいました。その頃は電車も30分に一本位しか無いので、駅前の電車乗り場は人でぎっしりだったそうです。学校には紙屋町経由で行くのですが、人がごった返しているのどこに並んでいるのか分からず、並んでいた列の真ん中へんまで来て比治山線と分かり、また並び変えたそうです。

父は八本松から通っている友達と一緒に並んでいましたが、空にB29が飛んで来て、落下傘で2～3個の白いもの（そういう印象のもの）を落としているのが見えたそうです。その時、一緒にいた友達が『おい“サポイチ”がおるぞ』と言ったのです。“サポイチ”というのは父の学校の先生のあだ名で、当時は先生や上級生に会えば、必ず敬礼しなければならなかったのです。父も敬礼するため振り向いた瞬間、原爆が炸裂したのです。振り向いたおかげで、顔や身体の前面を焼かなくてすんだのです。

父は原爆が炸裂した瞬間、気を失い、気付いた時には広島駅の駅舎が倒れているところだったそうです。その気が付いた時ですが、父は無意識のうちに両手で目と鼻と耳を押さえていたそうです。毎日、毎日訓練させられていた、その成果がここに現れたのです。父は「このおかげで毒ガス（注：当時は放射能塵を毒ガスと思っていた）を吸わず良かったんだろう」と言っています。また父は原爆が落ちた時の位置と、気付いた時の位置とが違っていたので、「10m位爆風で飛ばされたんだろう」とのことでした。その飛ばされた衝撃で、父は

腰が抜けて足が立たなかったそうです。

衣服も燃えていたそうです。父はズボンに着いた火を消して、兵隊の「東練兵場（兵隊の訓練場）へ行け」という誘導で、そこに這いながら向かいました。まわりは死人の山、その死人の山を這って乗り越えていると、倒れた家の下敷きになった人の「助けてくれ …」という呻き声。それはもう地獄のように思ったそうです。その数え切れない死人の山は、兵隊達が鳶口を使って引っ掛けて收拾していたそうです。父も「もう少し気付くのが遅かったら、鳶口で頭のへんを引っ掛けられとったかも知れん」なんて物騒なことを言いました。

東練兵場に向かって這って行くと、空気は何か上から抑えつけられたように重く、炎は地を這うのだそうです。それも赤い炎ではなく黒い炎が…。父の直ぐ後ろを逃げていた人の“ギャッ”という悲鳴に振り向くと、その人は炎に飲み込まれていくところだったと言います。周りには焼けただれて、身体の肉が手の指先からズルズル落ちるままに歩いている人や、東練兵場に着いた時などは、2～3人、気の狂った兵隊が大声でわめきながら、日本刀を抜いて振り回していたそうです。考えるとゾッとします。

父は東練兵場にあった水の無い溝に入ると、眠ってしまったそうです。午後3時頃に目が覚めて“何とかして家に帰らねば”と思い、“線路をつたって行けば何とかなるだろう”と考えて這い始めたのです。その時見知らぬ小父さんが「私の息子もこの爆弾でやられたんだ」と言いながら、父におむすびと1円（当時の広島～八本松間の運賃）を下さったそうです。今も父はその小父さんに会いたいと言いますが、名前も解らないのでどうにもなりません。ああいう時にそんなに親切にして貰って、父はとても嬉しかったのでしょう。

おむすびを食べて元気の出た父は、海田までたどり着き、そこで正田先生という知人に逢って、シャツを頂いたそうです。父のズボンは焼けてボロボロで、上半身は脱いで裸だったのです。海田からは折り返しで汽車が動いていて、それに乗って八本松まで帰り、父の母（私の祖母）の弟（父の叔父）が迎えに来てくださり、叔父さんの家まで背負って行ってく

ださり、病院にも行って帰ったそうです。

叔父さんの家に着いて少し経つと、父は一週間も意識不明になりました。父は「安心した
せいかも知れない」と言っていますが。

それにしても父は幸運だったと思います。父自身も言います「駅前で被爆して、生き残
っている者は少ないぞ」と。今まで書いてないことの一つに、もし父が一つ早い電車に乗
り、猿猴橋の辺りで被爆していたら、絶対に死んでいただろうということです。被爆後のい
ろいろな人の親切な計らい。その点でも父は恵まれていたと言えるでしょう。

被爆してからの父は、人生が一変したとも言えるでしょう。おじいさんが亡くなったの
で、5人兄弟の真ん中で、ただ一人の男であった父は、やむなく農業を継がねばなりません
でした。その時38歳だったお母さんは小学校の先生をしていて、あまり農業をやったこと
が無かったし、いろいろあったようです。父は学校へ行くのを断念せねばならなかったの
です。当時13歳の父は、とても苦悩したと思うのです。

戦争は父の青春までも奪っていったように思います。父の話を聞いて、絶対に二度と戦争
を繰り返してはならないということを再度確信しました。また父の苦労がわかった今、もう
ちょっと親孝行もしなければいけないなあとも思いました。

註

鳶口。長さ 160cm 位の檜の丸棒の先に、鉄製の鳶のくちばしのようなかぎを付けた道具。
木材業者が丸太を動かすために使ったり、消防用具として用いていた。

『命の恩人と言われる祖父』

「父母の現代史」1986年版より

<広島・被爆の記録3>N. M.

40年前の8月6日、その日世界で初めての原爆が落とされ、一瞬にして約14万人の人が死に、その数倍の人が負傷した。その沢山の被爆者の一人である私の祖父にその日の出来事を聞いた。

祖父は、40年前の事を一つひとつゆっくりと語ってくれた。当時祖父は、原爆ドームの中にあった広島軍用木材株式会社の事務所に勤めていた。8月6日も、いつもと変わり無く汽車で広島に着いた。電車に乗ろうとしたが、そこには電車を待つ人の長い行列が出来ていた。そこで、祖父はしかたなく友人と歩いて会社へ行くことにしたのでした。もしその時、そのまま待っていたら電車の中か、駅前あたりで被爆して、大怪我をするか死んでいたかも知れません。祖父は歩いていて暑かったので途中で友人と別れ、知り合いの人がいた鞆町のカトリック教会に寄り、そこで休ませて買ったのだそうです。

その時です。「ピカッ!」「ドーン!」8時15分、原爆が炸裂し、祖父は家の下敷きになってしまったのです。しかし幸いなことに、その日はとても暑い日だったので、教会に入った時に着ていた長袖のじゅばん（註 当時シャツは敵性語と言うのでこう呼んだ）を脱いでいたので、どこにも引っ掛かったりすることが無く、外に出ることが出来たのでした。祖父は背中を痛めた以外、大した怪我はしていなかったそうです。

そこであたりを見回すと、教会の裏の家でも下敷きになっている母子がいました。祖父はそこへ駆けつけ、「今出してやる」と言って残骸を上から取り除こうとしたのです。すると中から、『私はここで死んでもかまいません。でもこの子は助けてやってください。おじさ

ん、この子を助けて逃げてください』と言う母親の声が聞こえてきたそうです。

その時祖父は、初めて親の有り難さが解ったと言います。私も、親が子を、子が親を殺したりする事件が増えている今日、その人達にこの話を聞かせてあげたいと思います。もし今こんなことがあったら、今の母親や父親が、果たして自分達を犠牲にしてまで子どもを助けることができるのでしょうか。

祖父はとにかく残骸を動かし、母親と子ども二人を助け出して縮景園の裏にある川の中に逃げました。そこへ行くまでは、死体を乗り越え、電線をくぐり抜け、炎の中を必死で逃げて行ったのでした。

川に避難していると、工兵隊の舟が負傷者を一杯に積んで来たようです。その舟に祖父の知り合いの将校が乗っていて『舟に乗りなさい』と言ってくれました。祖父は「私はいいから、この母親と小さい子を乗せてくれ。」と頼んで、そのままもう一人の子と川の中に入っていたのでした。

その間中。風で瓦やトタンをはじめあらゆる物が頭の上を飛んで行き、炎も風に煽られて来るので、頭まで水に漬かったり、出たりしていたのだそうです。しかしそんな中で、力尽きた負傷者達の中には、次第に流されて行く人も沢山あったと言います。

祖父は2時頃川から出て向洋まで歩いて行き、そこから始めて汽車に乗って白市駅まで帰ることが出来たのです。途中汽車の中で死んでいった人も沢山あったと言います。

一ヶ月位経った頃、高熱が出て髪の毛を引っ張ると古い筆の穂のように抜け、歯ぐきからは血が出て、やがて歯が全部抜けてしまったのでした。同じ会社の女子事務員の人にも髪が抜けた人があり、その人は黒い風呂敷を被って会社に来ていたそうです。祖父が助けた母子は星島さんという人で、助けた二人の子どもさんのうち清子さんという人が、1982（昭和57）年10月に「青春時代の被爆」という16ページの短い本を出版されて、祖父のもとに

も一冊送って下さったのです。

その本には、祖父に母親、妹、そして自分が助けて買ったということ、そしてどのように逃げて行ったかについて、さらにその後の生活などが克明に記録されているのです。

祖父の話と時間的なことについて多少の食い違いがあるということでしたが、なにしろ40年も前のことですから無理もないことだと思います。40年という歳月は余りにも長く、記憶も薄れさせる恐ろしいもののような気がします。その本の中で星島さんは、『青春時代はまさに灰色だった』『戦後からの3年より原爆当時の方が長かった』と語っておられます。私はこの二つの言葉が、大変強い印象として心の中に残っています。

現在祖父は、時々腰が痛いと言っていますが、どうにか元気に毎日を送っています。そして星島さんとの付き合いも、その後もずっと続けているのです。

私達は平和な広島、平和な日本で生まれ育ちました。この平和をこれからも守って行くために、私達が語り受けた貴重な体験を、次の世代に語り継いで行かなければならないと思います。青春時代を灰色にしないために！

『靴の名札で確認するしかなかった』

「父母の現代史」1988年版より

<広島・被爆の記録4>A. S.

私の母が、祖父の体験を話してくれました。私の祖父は、広島市内へ戦争のために行っていました。そこで広島市内と外を他の人たちと代わり交替で見回っていたのです。原爆が落ちたとき、運良く市外にいたのです。そのときは凄い光景だったそうです。きのこ雲が上がり、それは何が起こったのか解らなかつたそうです。それで大変だということで、2～3人で市内に行ったのです。行ったらもう死体のごろごろあったり、「水をくれ」という呻き声は聞こえるし、川とか水路みたいなところにも死体はいっぱいだし、仲間を捜そうと思って死体のなかを歩いて捜していたが、なかなか見つからなかつたそうです。だから仲間の兵隊さんの履いている靴の名札を目印にして捜したそうです。そして祖父の仲間の人は、ほとんどが亡くなつたそうです。

その後の広島は、大変だったと思います。休み中、テレビや新聞などで戦争についてたくさん取り上げられていました。本当に数え切れないようなたくさんの悲惨な戦争体験があると思います。日本のために惜しみ無く死んでいった人、やけどや怪我をして苦しんで死んでいった人、みんな戦争の被害者です。しかし、いつも日本は被害者だったのではないのです。歴史の中では時には加害者だったこともあるのです。このようなことも“平和”を守るため、知っておく大切なことだと思います。これから、戦争体験者はどんどん減るばかりです。世代が変わっていくのだから仕方ありません。今、私たちに出来ることは、戦争のことをたくさん聞いたりして、できる限り次の世代に伝えることが大切だと思います。戦争のことを知らずにいれば、また戦争を繰り返すかも知れません。だから伝えることは、平和のために努力することだと思います。

『祖母の8月6日』

「父母の現代史」1988年版より

<広島・被爆の記録5>R. N.

～父方の祖母の被爆体験から～

私（祖母 当時 33 歳）は戦争中、広島市の南観音町にある蓮根田と茄子畑に囲まれた十数件の団地に住んでいた。

8月6日の朝、鏡に向かって髪をといていたとき、ピカッと光ったかと思うとドーンという異様な音がして一瞬のうちに何もかもが吹き飛ばされ、砂ぼこりと共に家が壊れていった。

はっと我にかえって子どもたちのいる奥の部屋の方へ飛んで行った。次女（当時5歳）が「おかあちゃんと」と飛ついてきた。赤ん坊（父 当時4ヵ月）の泣き声をした。「あ一生きている」とハンモックと共に投げ出された赤ん坊を抱いた。主人（祖父 当時40歳）は丁度表の防空壕の上にあいたので（防空壕の上は茄子畑だった）ワイシャツと帽子の間の首の所を火傷して「痛い、痛い」と言っていた。見ると水ぶくれになっていた。私自身はガラスが顔や腰、腹に突き刺さっていて血が流れていた。みんなびっくりしたが、柱という柱の四方八方にガラスが突き刺さっていたので、身体に突き刺さるのも当然だった。外は陽のあたった所は全部焼けており、蓮の葉も、稲も、茄子も、干していた布団までも焼けて煙が立っていた。私たちは南観音町だけがひどくやられたのかと思ったが、市の中心の方から全身が火傷してフラフラになった人たちが南観音町に来て、破裂した水道の水を飲んでゴロゴロとその辺りに倒れていった。気の毒には思ったが人の事どころではなかった。見渡す限り何も無くなっていて、ただ煙があちこちから立ち昇っていた。

長女（当時13歳）が学徒動員で建物を壊す作業に出て行ったきり夜になっても帰ってこ

ない。主人は火傷が痛くても、炎天下の中 B29 が飛んでいるのに長女が心配なので、7日の日は県庁、8日の日は瀬川倉庫と捜し歩いたが、死体を片付けた後だったので見つからなかった。しかたなく誰のものとも分からない骨を拾って帰ってきた。長女の死を私は信じなかった。しかし、何日たっても長女は帰ってこなかった。夜になっても電気はない。真っ暗な中、死体を焼く炎だけが夜空を焦がすばかりだった。水もない食べ物もない。急に私は乳が出なくなった。もう駄目だから家族全員で死のうと話し合ったこともあった。

『今でも朝元気に出ていった長女が、それきり帰ってこないなんてあきらめられない。二度とこんなことがあってはならないと思う。戦争なんか絶対にしてはならない。世の中の母のため、妻のため、全女性のためにも』

『気がつくと 3m ほど飛ばされていた』

「父母の現代史」1988 年版より

<広島・被爆の記録 6> T. K.

私の母は 5 歳の時に被爆しました。当時、母は宝町（爆心から 1.3km 以内）という所に両親と生まれたばかりの弟と、母方の祖母といっしょに住んでいました。

8 月 6 日の朝、母は近所の牛乳屋さんにお使いに行きました。原爆にあったのはその時だそうです。片側には山陽高校（当時は中学校）の赤レンガの塀、もう一方には民家があった路地を通っている時、急に目の前が真っ暗になり、気が付くと 3m くらい向こうに裸足で立っていたそうです。家々は折りたたんだようにぺしゃんこに潰れ、比治山の方まで市内を見渡せたそうです。近くにいたお姉さんに声をかけると、そのお姉さんも気が動転していたでしょう「おかあさん」と叫ぶと、母を置いて自分の家の方へ行ってしまいました。それで母も自分の家へ戻ってみたそうです。母の家もやはりぺしゃんこに潰されてしまいました。母はおかあさんたちを捜しましたが、声はなかったそうです。

そこへ知らないお兄さんがやって来て「ここにいてはいけないから」と言って連れて逃げてくれました。逃げる途中で鶴見橋という木造の橋が、渡ったとたんに崩れるということがあったり、川の中に人間がたくさん浮かんで死んでいるのを見たりもしたそうです。

そのお兄さんは海田の自分の親戚の家に母もいっしょに連れて行ってくれました。当時ケガをした人や、親とはぐれてしまった子どもなどの名前を届け出て、それを手掛りにして捜すというような所があったそうで、母もそこへ届けを出してもらって、海田でしばらく待っていたそうです。

そのうち母のお父さんの会社の人捜しに来てくれて、今度はその人の家に一週間くらいお世話になったそうです。母のお父さんは被爆当時吉島にいて、倒れてきた何かの下敷きに

なって、ケガをして動けなかったのです。一週間して八本松にいた父方の祖母が母を捜しに来てくれて、そこでやっと八本松に帰ることができたそうです。曾祖母は宝町の家で3体のお骨を見つけた時、母も死んでしまったのだと思ったそうです。

母は被爆した時、裸足で歩いたために、足をガラスでケガした以外、ほとんど外傷はありませんでした。しかし八本松に帰ってから、吐いたり下痢をしたり髪の毛が抜けたりしたそうです。熱が出て寝ている母を見て曾祖母は「今度こそ本当にダメだ」と思ったそうです。それでも、よもぎを煎じて飲ましたりしていると徐々によくなったそうです。

母は高校の時、貧血がひどかったそうです。今でも血管が人より浮き出ている、ちょっと打っただけでも内出血で青くなったりします。

私は母が好きだし、私のまわりの全てが好きです。だから戦争なんかでそれを奪われるのはいやです。

『25年経っても消えなかった放射能』

「父母の現代史」1988年版より

<広島・被爆の記録7> K. Y.

私の父も母も直接戦争体験はしていません。けれど父は戦争で父親を亡くしています。

母の父、私の祖父は、広島市内に原爆が落とされたとき、広島には居ませんでした。次の日に家族を捜しに広島へ行きました。結局、家族は見つからなかったそうです。そしてそのとき、祖父は放射能を浴びてしまったのです。そんなこととは知らず、祖父は元気に暮らしていたそうです。そして25年が過ぎた頃、あのときの放射能の影響が、祖父の身体に現れ始めたそうです。25年経っても、祖父の身体の中の放射能は、消えていなかったのです。

私たちは、広島に住んでいるということで、特によく、原爆についての学習をこれまでしてきました。話を聞いたり映画を見たり、原爆資料館にも何度も行きました。原爆というのは、とても恐ろしいものだということが頭の中に焼き付いていますが、本当の恐ろしさは解っていないと思います。戦争経験者が減っていく中で、今まで聞き役だった自分たちが、今度は子どもたちに教える番です。直接、戦争体験の無い私たちが教えるのは、とても難しいことです。今もし戦争が起こったら、自分たちはどうなるのか、世の中はどうなるのか、戦争を知らない私には、想像することも困難です。でも、知らないからといって知ろうとせず、このまま戦争の恐ろしさを忘れて、これまで二度と戦争を繰り返すまいと、自分の体験を語ってきた人たちの努力を無駄にしてはいけません。せめて自分の両親や、祖父母の体験を自分の子どもたちに語り継いでいくという、ささやかな戦争への抵抗を、一人ひとりがやっていけば良いと思います。戦争の恐ろしさを人々が忘れないように、今度は私たちが語る番です。

『わが祖父の体験』

「父母の現代史」1988年版より

<広島・被爆の記録8> T. K.

この度、西条中央公園の敷地内に「賀北部隊原爆被災者救援之碑」が建てられました。この碑には、当時賀北部隊の隊員だった祖父の名も刻み込まれています。これから祖父の体験を記していこうと思います。

私の祖父は戦争中、兵隊として召集されませんでした。というのも、祖父がひどい近視だったからです。だから、家で一日中農業をしていたということです。そしてついに1945年8月6日、ピカドンが広島市内に投下されました。その後間もなく、広島聯隊区司令部の下令により賀北部隊（隊員約250名）が編成され、私の祖父も隊員として広島に赴くことになったそうです。6日の夕方部隊の仮兵舎であった県立西条農業学校に集合し、西条から海田まで汽車に乗り、海田からは線路不通のため徒歩で、現在の基町の近くにあった西練兵場に向かったそうです。

隊員たちは国民服を着て、洗面用具や軍隊の規則などが記してあった手帳を奉公袋に入れ、持って行ったということです。

7日の夜明け前、祖父は広島に入市したそうですが、見渡す限り焼け野原で「助けてくれー」と叫ぶ人、全身火傷のため川につかっている人は皆、真っ黒に焦げ、皮膚も焼けただけであり、祖父は目に入ってくる状況をこの世のことではなく、まるで地獄のようだったと語ってくれました。

さて、賀北部隊とは被爆軍人の死体の整理や焼却活動をするために編成されたもので、7日の早朝から祖父たちは爆心地から数百メートル以内の地域の救援に当たったのだそうです。周辺には、前も後ろも見分けがつかず、人間とは思えない悲惨な姿の死体のごろごろ転

がっており、また死体からの悪臭も相当ひどかったそうです。死体整理、焼却作業といっても、一人ひとり棺桶の中に入れて焼くなんてことは出来なくて、防空壕の中へ、爆風によって飛ばされた街路樹やあまり燃えずにすんだ家の柱を入れて火をつけ、その上に担架であちこちから運んで来た死体を重ねて焼却したそうです。夜は飯ごうでご飯を炊いて食べ、川の中で身体を洗い、安佐郡祇園長東の民家に宿泊させてもらったそうです。祖父たちは7日から12日までこの作業を続け、8月13日賀北部隊全員が広島駅より汽車で西条に帰ってきたということです。約一週間の間、真夏の太陽の照りつける暑さと、目の前に見た悲惨な状況の下、死体整理の作業をしたことで、祖父たちが疲労困憊したのは言うまでもありません。祖父は今でもあの一週間の間に見た悲惨で、地獄のような情景が目に焼き付いて離れないということです。

今回、祖父の話聞き、祖父の言葉の一つ一つが私の頭の中に当時の状況を生々しく想像させ、原爆の恐ろしさを改めて感じさせました。そして、今のこの平和な時代を保ち、二度とあやまちを犯してはならない。この世を地獄にしてはならないと、私はかたく思いました。

『ゴロゴロと落とされていたのは死体だった』

「父母の現代史」1988年版より

<広島・被爆の記録9> T. O.

1945（昭和20）年8月6日 晴れ、午前8時15分、米軍により原爆投下。

朝食の支度を始めた頃に空襲警報が鳴り、5歳だった母と7歳の伯母と祖母、そして祖母の家族が防空壕に入った。しばらくして警報解除のサイレンが鳴ったので、皆、家に戻り朝食の支度を始めた。その間、母と伯母は庭で遊んでいた。朝食に2人は呼ばれて家に入り、伯母はすぐ部屋に入ったが、母は水が飲みたくてそのまま土間を回り台所へ行った。そして蛇口を捻ろうとした瞬間、奥の部屋から「アーッ」という叫び声、ハッとして外を見ると「ヤッタッ」という叫び声と同時に眩しい光とまるで入道雲のようなものを見た。不意に何も分からなくなった。気が付くと、周りは真っ暗闇。ポヤァと座っていると、祖母のまるで気が狂ったように母の名を呼ぶ声。何も分からないまま恐怖心にかられ、その声の方に向かって走った。爆風で流し台の下に吹き寄せられたのが幸いして、ガラスで切った傷だけだったことも後で気が付いたのであって、その時はただ無我夢中で祖母の手にすがりついたのだった。

「アーッ」といった瞬間、伯母を抱き寄せその上にかぶさった祖母の上に、天井から落ちた木や柱が載っていた。ほこりが落ちついて少し明るくなり、自力で家の外に這い出ることが出来て、嬉しかったのもつかの間、母の目に映った光景は… 見渡す限りの家はべしゃんこ、動いている人は皆焼けただけ、血を流しフラフラとあてどもなく歩くか這っているか、幼少の母にはとても理解できなかった。

その後の記憶は、幼少であった上に突然の恐怖で途切れとぎれでしかない。

大きな病院に着いた時のこと、窓ガラスは全部割れていた。白衣を着た看護婦さんが箒で

ガラスを掃き寄せ、軽そうなケガの人々が列を作り、一つの病室へ入って行く。祖母に連れられて入った病室には医者らしき人はなくて、大きなバケツに赤チンのような物を溶いて無言でベタベタと塗り、怒ったように包帯を突き出して渡す男の人と、これもまた無言で出ていく人々…。病院の庭には大きなトラックが着き、荷台から地面へと板が渡され、まるで汚れた人形のようにゴロゴロと落とされる死体、それが人間だと知った時のショック。

次に祖母の知人と会った。その人は、家族が家の下敷きになり、自分だけ助かったようだ。なんとか子どもを助けようと柱を動かそうとしてもどうにもならず、近くにいる人に助けを求めても手を貸す人はいなかったらしい。そのうち火事が起こって、周りが火に包まれ、みすみす殺してしまったと、気の抜けたように涙も見せずに話してしまうとフラフラとどこかへ行ってしまった。

祖母の実家に帰り着き、防空壕の中で眠りについた頃、夜空を焦がす真っ赤な炎に驚き飛び出したら焚き火だと聞かされ、再び寝ていると異様な臭いがしてきた。翌日、隣人の話で、死体を集めて焼いていたことを知った。

これは私が中学 1 年生の時に書いたレポートです。私は当時抱いた戦争への恐怖を、今再びレポートを書くまで忘れかけていました。

しかし、戦争は決して昔の出来事ではなく、今でもその傷跡を心身に残している人たちもたくさんいることを改めて考えさせられました。私たち若い世代は、とかく平和にひたきってしまいがちですが、もっと政治に関心を持ち、参加することが本当の恒久的な平和をもたらすものと私は信じています。